図南小

共に学び合い、問題を解決していく子の育成

～相手意識をもって伝え合う活動を通して～

（３年計画の３年次）

校長　　鈴木　規夫

１　研究主題について

本校では教育目標に、「明るく　やさしく　たくましい子」を、努力目標の一つに「自ら考え、学び合う子」を掲げている。さらに学校課題をふまえ、今年度の学校目標を「ともに成長する子の育成」と設定し取り組んでいる。この目標の具現化のために、児童一人一人が学ぶ意欲をもち、問題に真剣に向き合い、自分の考えを友達と積極的に伝え合う中で、自分の考えを広げたり深めたりしていくことが必要になると考えた。

一年次は、算数科を研究教科として問題解決的な学習に取り組んできた。その結果、問題提示の工夫をすることで問題場面を共有し、児童一人一人が課題をとらえることができた。また、提示した後の児童の気付きや疑問について交流したことが、解決への見通しをもつことに役立ち、主体的に学習をすることにつながった。さらに、話合いの目的と手順を示し、児童に考えをもたせてから伝え合う場を設定したことで、「話したい」という思いをもって話合いが行われるようになった。しかし、自分の考えを話すことに気持ちが傾き、相手を意識して話したり聞いたりすることが十分とは言えないことや思考の過程が見えるノート指導について、さらに研究が必要であるという課題もあげられた。二年次は問題提示の工夫を継続するとともに、目的を明確にした伝え合う場について算数科を中心に研究を進めた。相手意識をもって伝え合いができるようにするために低・中・高学年での目指す子どもの姿を設定したことは、児童一人一人の「話す」「聞く」スキルの向上につながった。また、課題に対する見通しや自分の考え、学習の振り返りを書くことで、課題解決の方法に目を向けたり、友達のよさや自己の変容に気付いたりすることができた。しかし、全体の場で自分の考えを分かりやすく伝えようとする表現力や相手の考えを分かろうとする理解力は十分とは言えないという課題も残った。そこで今年度は昨年度までの研究成果を生かしながら研究教科を社会科とし、主体的に問題解決に向かうことができるよう問題解決的な学習に向けて授業改善を図ることとした。さらに、自分の考えを伝え合う場において、児童に新しい気付きが生まれるような話合いを工夫することで研究主題に迫ることができると考える。

２　研究のねらい

自分の考えを伝え、共に学び合い、問題を解決していく力を高めるための効果的な指導のあり方を社会科における授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫と目的を明確にした伝え合う場の工夫をすることにより、主体的に問題に向かい、共に学び合うことができる。

４　研究内容

⑴　導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけの工夫

ア　資料の吟味

⑵　目的を明確にした伝え合う場の工夫

ア　課題解決のための話合いの場面の設定と話合いのさせ方

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師等	授業の概要
９	１５	第１回授業研究　第３学年 社会科「店で発見」 授業者　　教諭　　加藤　晃介 指導助言 校長　　鈴木　規夫	比較する資料を段階的に提示することにより、児童は消費者の立場になって考えることができた。視点を増やしながら話し合いをさせることは、児童の実態に合ったものであり、スーパーマーケットの工夫に気付くことにつながった。
１１	２４	第２回授業研究（要請訪問）　第５学年 社会科「世界とつながる自動車」 授業者　　教諭　　石橋　柊子 指導助言 教育指導課　大野　勉　主任指導主事	授業の導入で、２つの事象が表されているグラフ資料を提示し、どちらが現地生産台数かを予想させた。課題を焦点化することで、児童が主体的に取り組むことにつながった。動画の資料やペアでの伝え合いにより、現地生産が増えている理由を理解することができた。

⑵　一般研修

月	日	内容・講師等
４	７	エピペン講習会　　講師　　養護教諭　大黒　恵里子
５	２６	一人一台端末の活用に関しての研修 講師　　総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事
６	２	体育科に関しての研修　　講師　　教頭　淡路　浩志
６	１６	ＡＥＤ講習会　　講師　　養護教諭　大黒　恵里子
６	３０	特別な配慮を要する子への手立てについて 講師　　こども支援センター　小林　真由美　副参事兼主任指導主事
８	２０	指導と評価の一体化 講師　　教育指導課　福田　秀貴　主任指導主事
８	２５	県学習状況調査の分析・考察

６　研究の成果

⑴　授業のねらいに即し、課題を見出していくような資料を提示するために資料の吟味をした。さらに、授業の導入で具体物やグラフ資料の提示の仕方を工夫し、比較させることで児童の思考にゆさぶりをかけた。その結果、課題解決に必然性が生まれ、児童の意欲が高まり主体的な学びへとつなげることができた。

⑵　ペアや小集団、全体など、適切な形態を選択し、課題について予想したことをノートに書かせてから意見交流させたり、考える視点を与えて話し合わせたりした。このことにより、児童は多様な考えに触れ、自分の考えを深めたり、新しい気付きをもったりすることができた。

７　研究の課題

⑴　吟味された資料から課題を見出すことはできてきているので、様々な資料の中から必要な情報を読み取り、資料を根拠に自分の考えを書いたり話したりする力をつけさせたい。さらに、自分の考えを相手に分かりやすく伝える力や内容を聞き取り理解する力を向上させるための手立てを今後も研究していく必要がある。

（記入者　　松橋　麻紀）